

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 18 日現在

機関番号：32693

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2011～2013

課題番号：23653158

研究課題名(和文)生活困窮者の参加型コミュニティ開発に関する実証・実践研究

研究課題名(英文)The Action Research on the support model for the poor and needy-Focus Participatory Learning Action-

研究代表者

岡本 菜穂子 (Okamoto, Nahoko)

日本赤十字看護大学・看護学部・講師

研究者番号：30553565

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,600,000円、(間接経費) 780,000円

研究成果の概要(和文)：日本の1か所のNPO団体にて、元路上生活者1をプロジェクト協力者として、週1回会議を実施し、研究者はファシリテータ 役として、共に学習するプロセスを踏んだ。自分たちの強みや弱み、自分たちのできそうなことを探し、自分たちの居場所づくりを行った。毎日、自然体で時間を過ごせ、楽しみながらその場所にいられる空間が形成されるようになった。彼らは何らかの福祉支援を受けている側であるが、支援を受ける受け身の姿勢から脱却し、自ら主体的に行動するという意識が再生されてきた。この意識の変革は、当事者が参加するプロセスを踏むことから発生し、プロジェクトの持続性を促進できることが明らかになった。

研究成果の概要(英文)：The objective of the this study is to explore the support model by using Participatory Learning Action with the poor and needy in Japan.

Members experienced homeless but they were recovered by group support and empowere inthier community. Members contributed to grow up social relationship in their community and had been a challenging spirit with purpose and motivation toward everything and with self-awareness pf making a contribution to others. It inc luds the sense of self-progression and the sense of being approved of by others.

研究分野：社会科学

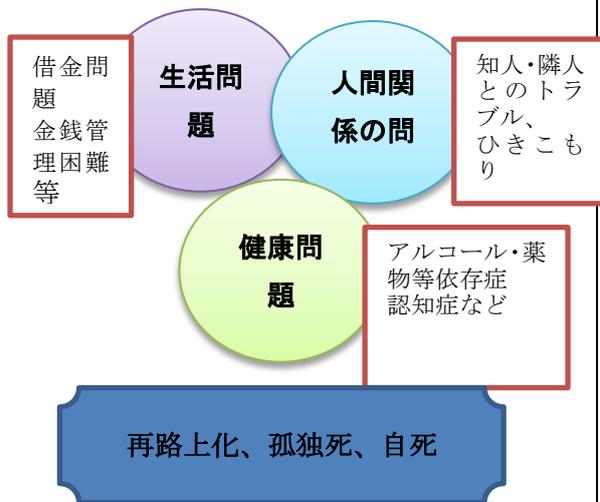
科研費の分科・細目：社会福祉学

キーワード：生活困窮者 参加型 エンパワーメント 居場所 生きがい

1. 研究開始当初の背景

生活困窮状態にあるもの、及び生活困窮状態を脱したものの数名から聞き取った現在までの生活に至る上で、遭遇したことをまとめると以下の通りであった。

生活保護や自立支援制度によりアパート生活や簡易宿泊所への再定住化を果たした彼らは、新たな生活拠点において近隣の人びととのコミュニティを形成していくことが必要ではあるが、以下の課題が待ち受けていた (図1)。



課題1：保護費の金銭管理やごみの始末と出し方のルールが守れないなどの生活問題

課題2：簡易宿泊所での知人や近隣の人とのトラブル、見知らぬ土地でのアパート生活による引きこもりなどの人間関係問題

課題3：アルコール・薬物等の依存症、認知症などによる健康問題

これらの大きな課題が誘因となり、再路上化や孤独死、自死の現象が起こってきていることが浮き上がった。

上記の3つの課題から生活困窮者の生活の質を改善していくにあたり、2つの問題点を挙げた。

1. 「孤独」が貧困を固定化させている。
2. 居場所のなさが生きがいを失うことにつながっている。

私たちの問題意識から以下の仮説を立てた。

1. 多くの人に自分が受け入れられていると思える居場所と役割 (生きがいを感じるもの) があることが、再定住化を果たした生活困窮者が直面する課題を解決する糸口になるのではないかと。

2. 居場所を通じて生きがい感を回復することが個々の自尊感情回復につながるのではないかと。

2. 研究の目的

生活困窮状態にある人々が決定に参加すること(エンパワーメント)を通して、生活困窮者の支援モデルプロジェクトを実践し、生活困窮状態にある人たちの生活の質の向上に向けた事業を提案する。

2. 研究の方法

1) 研究デザイン

Participatory Learning Action アプローチを用いたアクションリサーチ

2) 研究参加者：生活困窮状態にあるもの、及び生活困窮状態を脱したもの 10 名程度自ら、仲間の能力向上に向けて PLA アプローチに参加意思を表明する者

3) データ収集期間：2013年1月~2014年3月

4) PLAアプローチの進め方

(ア) 参加者の募集：生活困窮者支援団体を通じて、研究内容の説明を行い、紹介を得る。

(イ) 研究者及び研究協力者がファシリテータとなり、参加者が地域の地図づくり (地域の全体図、インフラ・資源図、人々の行動範囲)、日課・行動表、タイムライン・年表づくり、社会関係図 (ベン相関図) 作成を行う。

(ウ) 上記の地図及び社会関係図等から将来構想図 (自らの将来の展望、自分たちの暮

らしやどのような生活がしたいかなど)の作成を行う。

(エ) 将来構想図を基にモデルプロジェクト事業を実践する。

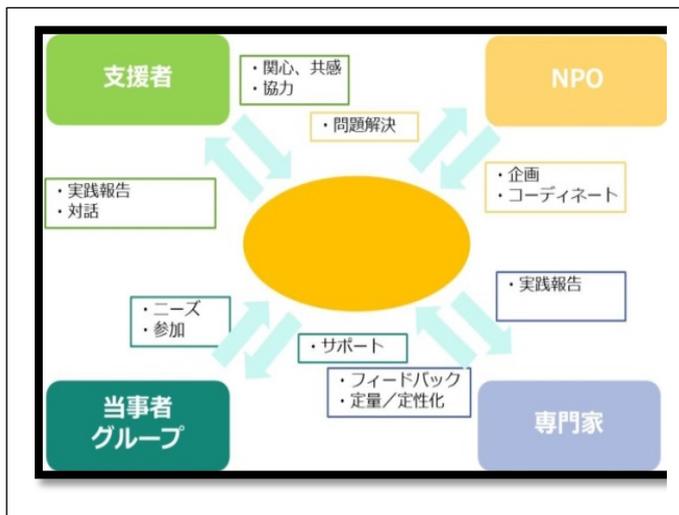
(オ) 研究者及び研究協力者がファシリテータとなり、参加者が事業実践前後で生活の質変化の評価を行う。評価を踏まえて、新たな事業目標の設定を参加者が研究者と共にを行う。

#### 4. 研究成果

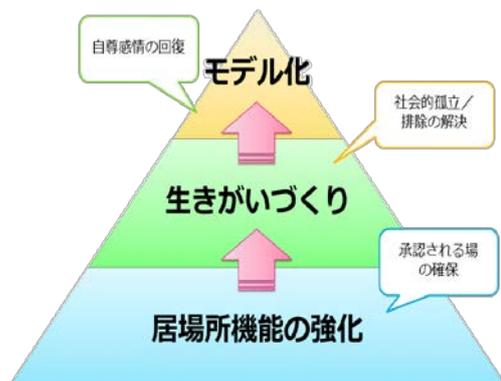
<プロジェクトの目的>

- ① 孤独感の緩和
- ② 自尊感情の回復
- ③ 社会的孤立／排除の解決

<プロジェクトチーム>



<プロジェクトアウトライン>



プロジェクトのアウトラインとして、承

認される場の確保による居場所機能の強化」がある上で、居場所を通じた「生きがいつくり」による社会的孤立／排除の解決を目指しその結果を通して個々の自尊感情の回復し、モデル的に他の団体や地域においても実施を試みた。

<プロジェクトプロセス>

-その1-

生活困窮者（現在、生活保護などを得ながら生活している路上生活経験者）8名を当事者グループの核として位置づけ、週に1回2時間程度、ファシリテータ1名と共に話し合いの機会を設定し、プロジェクトアウトカム指標：高齢者生きがい感スケール（K-I式）16項目として実施した。

1□メンバーの行動マップづくり

2□関係者マップ

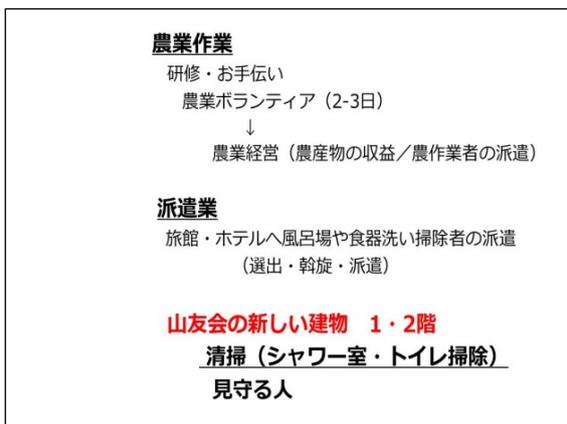
3□やってみいたいことリスト

4□ストレングス

-その2-

プロジェクトアウトカム

3□やってみいたいことリスト



<参加者のやってみたいことの実現>

・二人一組輪番制のトイレ・部屋の掃除

・軽引越し・引越しに伴う清掃

NPO を窓口として、軽引越しとそれに伴う清掃業のチラシを作成し、近隣簡易宿泊所の番頭へ当事者が届け、宣伝活動を行った。オフィス移転の際の不要物搬出、引越し業作業の依頼があり、オフィス用品を譲り受けることを条件に作業を行った。今後は、管轄自治体や関係団体へも宣伝活動を行っていく予定である。

・屋上でプランターを使用した菜園づくり

以前使用されていたプランターを使用して、NPO 施設の屋上で植栽をメンバーで行い、水やりやプランターの配置換えをメンバーで行っている。

\*こういう話はどうですか？⇒と持ってこられても困る

\*これをやって下さい・これをやりましょう ⇒と決められた事があればやる

\*二人ずつ組んで、トイレ・部屋の掃除が出来るといいな  
(二人で相談することができる)

\*どこかの部屋(簡易宿やアパート)を掃除に行く

↓  
報酬は缶ビール・ワンカップ焼酎1本くらいで良い

↓↓  
報酬(お金)ではなく、「皆でやり遂げた達成感」を味わいたい

\*家庭菜園

<どんな変化が参加者に生まれたか？>

- ・自分たちからアイデアをスタッフへ伝え、自分の役割を見いだすことができるようになった。
- ・自分たちから主体的に動き、周囲へ働きがけるようになった。
- ・指示されて行動することより、自分たちで考えて行動する場面が増えた。

<アウトカム指標でみた変化>

2013年12月時点(プロジェクト開始11か月後)生きがい感を測定するK-1式総

得点の平均値では、27.0であり、生きがい感スケールの下位尺度については、「自己実現と意欲」の平均値10.66、「生活充実感」の平均値8.67、「生きる意欲」の平均値3.00、「存在感」の平均値4.67であった。プロジェクト開始14か月後では、総合得点平均値が21.0、下位尺度については、「自己実現と意欲」の平均値8.17、「生活充実感」の平均値7.00、「生きる意欲」の平均値1.83、「存在感」の平均値4.00であった。

プロジェクト開始11ヶ月後より14ヶ月後のほうが、全体的な得点は低くなっていた。このことへの影響として、11ヶ月時点では二人一組の輪番制のトイレ/部屋の掃除が定着してきており、軽引越し/引越しに伴う清掃作業が参加者の期待していた通りには依頼がなく、意欲が下がっていたことがひとつの要因ではないかと考えられる。屋上でプランターを使用した菜園づくりが、14ヶ月段階では準備期間であり実際に植栽を始めたのは15ヶ月時点であったため、実際に体感する機会が乏しかったことが影響しているのではないかと考える。

<まとめ>

本プロジェクトは、参加者を中心に据え、自分たちで物事を決定するプロセスを鍵として参加者自身がやってみたいことを実現する方向性を探りながら、実現する支援プロジェクトであった。参加者は、何らかの福祉支援を受けている側であるが、決定に参加する(エンパワーメント)ことにより、支援を受ける受動の姿勢から脱却し、自ら主体的に行動するという意識が再生されてきた。この意識の変革は、他人による強制から生まれたものではなく、彼らの無意識の中で進展してきている。このような方向へ進むような支援の在り方は、参加者の活

動と参加者が拡大しながらプロジェクトの持続性を促進させていく点が評価された。本プロジェクトは、東京の1施設における取り組みであり、他のエリアや団体においても同じモデルのプロジェクトを構築するには、プロジェクトチームの構成や集まってくる参加者のつながっている期間にも配慮していくことがなければ、同様のプロジェクトが実現できるかどうかは今後他のエリアにおいて実践をしてみる必要がある。

しかしながら、今後、PLA (Participatory Learning Action) 手法を用いた生活困窮者の支援プロジェクトの成功を導くためにも、他の地域や団体での取り組みや、支援制度として成り立つことが可能かについて、事例を重ねて検証を行うことが必要である。

国際開発の現場ではボトムアップからの取り組みが制度を変えることもありえる。本邦においても参加型学習支援のプロジェクトを導入していくにあたり、支援制度として成り立つかどうかについて検証する価値がある。

## 5. 主な発表論文等

[学会発表] (計 2件)

① Nahoko O. The Action Research on the support Model for the Poor and Needy-Focus Participatory Learning Action-. 1<sup>st</sup>

RCINC, Thailand, 2014, p. 88

②岡本菜穂子、油井和徳、生活困窮者の居場所・生きがい感プロジェクト、第29回日本国際保健医療学会東日本地方会、2014、p. 33

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

岡本菜穂子 (OKAMOTO, Nahoko)

日本赤十字看護大学 看護学部学 講師  
研究者番号 : 30553565

### (2) 研究分担者

グライナー智恵子 (GREINNER, Chieko)

日本赤十字看護大学 看護学部 准教授

研究者番号 : 20305270